

幼児期の経験がレジリエンスと自尊感情に及ぼす影響 —「森のようちえん」の卒園児に注目して—

山口 美和*・酒井 真由子**・木戸 啓絵***・大道 香織****

(令和2年8月31日受付；令和2年12月2日受理)

要 旨

本研究の目的は、「森のようちえん」の卒園児及び一般の園の卒園児の保護者への質問紙調査を通して、就学前の教育がレジリエンスと自尊感情に及ぼす影響を考察することである。全国の「森のようちえん」の卒園児で小学2年生児童の保護者（森のようちえん群）と、中部地方にあるA市、B市、C市の3つの中都市の公立小学校に通う既存園を卒園した小学2年生児童の保護者（既存園群）を調査対象とし、森のようちえん群146名中85名（回収率58.2%）、既存園群1,382人中525名（38.0%）の回答を得た。クロス分析の結果、森のようちえん群の子どもは既存園群の子どもに比べて、レジリエンスに関連する8項目において、「あてはまる」という回答の割合が有意に高いことが明らかになった。また、自尊感情に関しては、「自分はダメだと思う」等の自己否定的な3項目について、森のようちえん群は既存園群に比べて有意に低かった。レジリエンス及び自尊感情に関する項目による因子分析を行い、就学前施設の種別と抽出された各因子とで分散分析を行ったところ、レジリエンスについては、森のようちえん群と既存園群とで有意な交互作用は見られなかったが、自尊感情については有意な交互作用が見られ、「自己意識」と「運動意識」が有意に高い得点であった。

KEY WORDS

社会情動的スキル、森のようちえん、卒園児、レジリエンス、自尊感情

1 はじめに

1. 1 問題の所在

近年、これからの情報化、グローバル化した複雑な社会を生き抜くための力として、創造力や批判的思考、コミュニケーション力や協働性等の、いわゆる21世紀型スキルの育成が急務となっている。こうした21世紀型のスキルの多くは、「認知的要素と社会情動的要素の両方を備えている」（OECD, 2015=2018:55）とされ、教育においては、認知的能力の育成とともに、社会情動的スキルをいかに育成するかが重要な課題となっている。

社会情動的スキルとは、「(a) 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、(b) 学校教育またはインフォーマルな教育によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会経済的効果に重要な影響を与える個人の能力」であり、忍耐力、自己抑制、目標への情熱といった「目標の達成」、社交性、敬意、思いやりといった「他者との協働」、自尊心、楽観性、自信といった「感情のコントロール」の3つの要素から成る（OECD, 2015=2018:52）。社会情動的スキルの獲得については、Heckman（2013=2015）も指摘しているとおり、幼児期の家庭生活や教育のあり方が、とりわけ重要な役割を果たすと考えられている。

Ikesako & Miyamoto（2015）は、社会情動的スキルを向上させる直接的投資の例として、家庭における親子のやりとりや、学校における正課・課外活動、地域でのボランティア活動（サービス・ラーニング）等のプログラムを挙げており、地域社会においては、ボーイスカウトなどの野外プログラムが、社会情動的スキルを学ぶ機会として有効であるとしている（Ikesako & Miyamoto, 2015=2015:17-18）。

「社会情動的スキルは、幼児期に形成されたスキルに基づいて、さらに革新的な学習環境や介入プログラムによる新たな投資を利用して徐々に発達する」（OECD, 2015=2018:127）ことから、社会情動的スキルの土台を育む幼児期に行われる直接的投資は重要である。社会情動的スキルを育むための経験が豊富に用意されている就学前施設を選択することは、幼児期における主要な直接的投資であるといえる。では実際に、子どもが在籍する就学前施設の教育の特色や、就学前施設における経験は、子どもの社会情動的スキルの獲得にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

このような問題意識に基づき、われわれは、日本の就学前施設の中でも「森のようちえん」と呼ばれる施設に注目して、卒園児の社会情動的スキルに関する調査を行うこととした。「森のようちえん」とは、「自然体験活動を軸に

した子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称¹⁾であり、2020年現在、全国で200を超える団体が活動している。

われわれが今回、「森のようちえん」に特に着目する理由は、野外での体験を中心とした特色ある教育スタイルにある。前述のとおり、ある種の野外プログラムが社会情動的スキルを向上させることが明らかになっているが、野外における子どもの主体的な活動を教育の中心に置く就学前施設が、社会情動的スキルの育ちにもたらす教育的効果については明らかにされていない。そこで本研究では、「森のようちえん」の卒園児と、それ以外の幼稚園、保育所、認定こども園等一般の就学前施設の卒園児との比較調査を実施することとした。

1. 2 先行研究の状況

国内において、幼児期の生活や教育のあり方と、社会情動的スキルの発達との関連を調査した先行研究として、ベネッセ(2016, 2019)が挙げられる。この調査は、3歳児から小学4年生までの子どもをもつ母親を対象とする7年間の縦断調査で、社会情動的スキルについては、好奇心・自己主張・協調性・自己抑制・がんばる力の5つの内容で構成される「学びに向かう力」として調査されている。その結果、幼児期に「物事をあきらめずに挑戦する」など「がんばる力」の得点が高かった子どもほど、小学校低学年時点で、自発的な学習態度や思考力が高い傾向があることが示された。また、幼児期から児童期の「がんばる力」には、子どもの意欲を大切にす親の態度や関わりが影響していることが明らかにされているが、この研究は、主として子どもの家庭での生活及び親の関わりが、子どもの認知的・社会情動的スキルに与える影響を分析したもので、就学前施設の教育内容との関連については調査されていない。

野外での体験活動が、社会情動的スキルに与える影響に関する先行研究としては、Gills & Speelman (2008) や、片岡 (2011) が挙げられる。Gills & Speelman (2008) は、チャレンジロープコースを使った野外冒険プログラムが、ミドルスクールとハイスクールの生徒及び大学生、成人等さまざまなグループにおいて、自己効力感や自尊感情、パーソナリティなどに影響を与えることを明らかにしている。また、片岡 (2011) は、中学1年生から高校3年生までの女子1,753名の調査を行い、ガールスカウト経験のある女子の方が、有意に自己肯定感が高いことを明らかにした。これらの研究は、野外体験活動が社会情動的スキルの向上に一定の影響を及ぼすことを示している点で興味深い。中学生以上を対象としており、幼児期の体験の影響については検討されていない。また、これらの調査では、野外冒険プログラムやガールスカウトという、非日常的なアクティビティの影響を明らかにするにとどまっている。

本研究は、日常的に野外での自然体験を取り入れている就学前施設の教育が、社会情動的スキルの向上に影響を与える可能性を検討するものであり、これまでの研究では取り上げられていない部分の解明を目指すものである。

1. 3 研究の目的及び分析方法

本研究の目的は、小学2年生児童の保護者への質問紙調査を通して、就学前施設における教育や経験の違いが子どものレジリエンスと自尊感情に及ぼす影響を考察することである。本稿においては、「森のようちえん」の卒園児と、それ以外の就学前施設の卒園児との比較を試みることにする。

日本の就学前施設には幼稚園、保育所、認定こども園等の種類があるが、「森のようちえん」以外の就学前施設を一括りにして比較する理由は、施設種別による教育内容の特色があるとは言い難いためである。日本の就学前施設は、保育内容については国の定めた要領や指針に従いつつ、各園が特色あるカリキュラムを組んでいる。特に私立園においては、特色あるカリキュラムの内容や教育方針は多岐にわたっており、屋外での自由あそびを積極的に推奨する園がある一方で、英語教室や体操教室、タブレットを使ったICT教育など、小学校の授業の形態に近い学習に力を入れる園もある。これらの特色は個々の園の方針によるものであり、施設種別による特色であるとはいえない。

これに対して、「森のようちえん」は、その定義上、屋外での自然体験活動を基軸にするという教育内容については、どの園も共通して実践しているという特徴がある。このため、本稿では、自然体験活動を日常の保育に取り入れている園と、それ以外の園との比較という観点で分析することとし、「森のようちえん」以外の園をまとめて「既存園群」と名付けることにした。(山口美和)

2 調査の概要

2. 1 調査対象

本調査では、小学2年生の児童の保護者を対象とした。小学2年生の児童の保護者を選んだ理由は、幼児期の教育の記憶と影響がまだ残っている時期であることと、就学後1年を経ており、学校への適応の状況についても把握できる時期であることが挙げられる。調査項目が多岐にわたるため、小学2年生の言語発達と理解度を考慮して、児童本

人ではなく、保護者を対象とする調査を設計した。ただし、自尊感情の項目に関しては児童本人の自己評価が重要であることから、保護者が児童の考えを聞きながら回答するように指示した。

調査対象は、以下の通りである。なお、既存園群については地区の偏りがでないよう無作為抽出で選出し、「森のようちえん」は概ね8年以上の運営実績があり、週5回以上の預かり型の保育を実施している園を選定した。

森のようちえん群：全国の「森のようちえん」の卒園児で小学2年生児童の保護者（146名）

既存園群：中部地方の中都市（3市）の公立小学校に通う既存園を卒園した小学2年生児童の保護者（1,382名）

2. 2 調査期間及び調査方法

2. 2. 1 調査期間

2019年4月～2019年12月

2. 2. 2 調査方法

調査協力校及び「森のようちえん」を通じ、保護者に「依頼状（研究の趣旨及び倫理的配慮について記載）、質問紙、切手付返信用封筒」を同筒したセットを配布していただいた。趣旨に同意する保護者のみ、無記名で質問紙に回答後、郵送で返信してもらった。なお本研究は、岐阜聖徳学園大学研究倫理委員会の承認を得て行われた。（承認番号2019-13）

2. 2. 3 測定の尺度

本研究では、さまざまな社会情動的スキルの中でも、レジリエンスと自尊感情に注目して分析を行うこととした。

レジリエンスは研究者によってさまざまな定義があり一定していないが、概ね、深刻な状況にあっても状況を肯定的に受け止め、問題を解決しようとする力や、心理的なストレスを受けても、立ち直ることのできる適応力などを指す。本研究では、小塩・中谷他（2002）の「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」という定義を採用し、尺度は、田中（2011）及び藤原・小泉（2017）による「児童用レジリエンス尺度」を用いた。

自尊感情は、自分に自信をもち、価値ある存在として肯定的に捉える感情を指す。近藤（2010）は、自尊感情には基本的自尊感情と社会的自尊感情の2つの側面があると論じている。前者は、他者との比較によるものではなく、絶対的な感情として自己を肯定する感情であり、後者は他者との比較において優れていることによって生じる感情であり、相対的なものである（近藤 2010, 13）。自尊感情の測定には、近藤（2010）の「SOBA-SET-TR 社会的・基本的自尊感情尺度・改訂版」を用いた。（木戸啓絵）

3 調査結果

3. 1 回収率と回答者の属性

3. 1. 1 回収数及び回収率

森のようちえん群146名中85名（回収率58.2%）、既存園群1,382人中525名（回収率38.0%）の回答を得た。

3. 1. 2 回答者の属性

(1) 性別

回答者の性別の内訳は、男性52人（8.5%）、女性559人（91.5%）であった。

(2) 年齢

回答者の年齢の内訳は、20代8人（1.3%）、30代284人（46.5%）、40代279人（45.7%）、50代11人（1.8%）、60代以上3人（0.5%）、無回答26人（4.3%）であった。

(3) 子どもの性別

子どもの性別の内訳は、男児316人（51.7%）、女児293人（48.0%）、無回答2人（0.3%）であった。

3. 2 クロス集計の結果

3. 2. 1 子どもの家庭環境

子どもの家庭の経済状況及び文化的環境について知るために、家庭が所有する物品を比較した。家庭にある物品については、家庭の経済資本と文化資本を反映すると思われる「ピアノ」「バイオリン」「美術品・骨董品」「図鑑」「百科事典」「液晶・プラズマテレビ」「クラシック音楽のレコード・CD」「パソコン及び周辺機器」「外国の本や絵本（漫画や雑誌を除く）」「子どもの個室」の10項目の物品等について、家庭が所有しているかどうかを尋ねた。

Table.1は、森のようちえん群と既存園群の物品等の所有状況の比較である。カイ2乗検定を行った結果、ピアノを除く9項目で所有状況に有意に差があることがわかった。9項目のうち、「液晶・プラズマテレビ」と「子どもの個室」については既存園群の家庭の方が所有率が高かったが、それ以外の7項目については、森のようちえん群の方が所有率が高い傾向があった。両者の差が大きかったのは「外国の本」と「図鑑」で、20ポイント以上の差があった。(山口美和)

Table.1 家庭が所有する物品等

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
ピアノ		43.0%	46.9%	-3.9
バイオリン	**	7.0%	1.5%	5.5
美術品・骨董品	**	24.4%	12.7%	11.7
図鑑	**	91.9%	68.4%	23.5
百科事典	**	46.5%	31.6%	14.9
PC周辺機器	**	95.3%	84.7%	10.6
液晶テレビ	**	82.6%	95.6%	-13.0
クラシックCD	**	53.5%	32.4%	21.1
外国の本	**	60.5%	36.0%	24.5
子どもの個室	**	24.4%	53.7%	-29.3

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「家にある」と回答した者の割合

3. 2. 2 就学前施設での教育に期待すること

就学前施設で行われる教育に期待することに関する19項目について、「とても期待する」「まあ期待する」「あまり期待しない」「全く期待しない」の4件法で尋ねた。森のようちえん群と既存園群との間で「期待する」と回答した割合に差があるかどうかを調べるため、カイ2乗検定を行った結果、13項目について有意差がみられた。(Table.2)。

両者のポイント差を見ると、特に期待の差が大きかったのは「小学校での学習に役立つ学力を伸ばす」という項目で、既存園の保護者の6割近くが期待しているが、「森のようちえん」の保護者は16.3%しか期待しておらず、40ポイント以上の差がついている。全体的に既存園の保護者の方が、就学前施設に対して小学校への準備教育的な内容を期待する傾向にあるのに対して、「森のようちえん」の保護者は「のびのび自由に遊ばせる」「好奇心や学ぶ意欲を高める」「自然体験など様々な直接体験をさせる」といった項目への期待が上位を占めるなど、遊びや直接体験を通じた社会情動的スキル育成への期待が大きいといえる。(酒井真由子)

Table.2 就学前施設の教育に期待すること

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
小学校での学習に役立つ学力を伸ばす	**	16.3%	58.8%	-42.5
芸術やスポーツなど得意な分野の才能を伸ばす	**	30.2%	71.1%	-40.9
教科の学習につながる科学的な興味関心を伸ばす	**	34.1%	63.8%	-29.7
着替えや排泄など日常生活を自立させる	**	67.1%	95.2%	-28.1
我慢する力を育てる	**	64.0%	91.3%	-27.3
社会に必要なマナーやルールを教える	**	76.7%	96.0%	-19.3
地域との交流や関わりを深める	**	59.3%	78.5%	-19.2
異なる国の文化や価値観への理解を深める	**	43.5%	61.0%	-17.5
簡単にあきらめない粘り強さを育てる	**	74.4%	90.7%	-16.3
筋道を立てて考える力を育てる	**	55.3%	69.8%	-14.5
身体能力や体力を向上させる	**	80.2%	90.0%	-9.8
表現力・コミュニケーション力を伸ばす	**	84.9%	93.4%	-8.5
思いやりや協調性を身につけさせる	**	90.7%	98.2%	-7.5
自然体験など様々な直接体験をさせる		96.5%	92.8%	3.7
主体的に行動する力を育てる		84.9%	87.3%	-2.4
好奇心や学ぶ意欲を高める		97.7%	96.0%	1.7
物事を多面的に考える力を育てる		79.1%	77.7%	1.4
のびのび自由に遊ばせる		98.8%	97.4%	1.4
自然を大切にすることを育てる		91.9%	92.9%	-1.0

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「とても期待する」「まあ期待する」を合わせた%

3. 2. 3 就学前施設に通っていたときに子どもが行っていたこと

Table.3は、「就学前施設に通っていた時に子どもが行っていたこと」について、カイ2乗検定を行った結果である。

7項目について有意差が見られた。両者の差が最も大きいのは、「不思議に思ったことを自分でやって試してみる」(ポイント差30.8)で、森のようちえん群は「していた」と回答した者が90.6%であるのに対し、「既存園群」は59.8%である。続いて、「屋外で虫や生き物を捕まえる」(ポイント差22.6)、「虫や生き物を飼って世話をする」(ポイント差17.2)、「ものの仕組みに興味をもって分解する」(ポイント差16.8)、「不思議に思ったことを図鑑などで調べてみる」(ポイント差14.7)、「自分で工夫しておもちゃを作る」(ポイント差13.1)、「友だちと協力して何かをつくる」(ポイント差9.5)であった。ここから、「森のようちえん」に通っていた児童ほど、幼児期には、興味や関心に基づき主体的に活動していた様子、友だちとの協同的な活動をしていた様子をみてとることができる。

Table.3 就学前施設に通っていたときに子どもが行っていたこと

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
不思議に思ったことを自分でやって試してみる	**	90.6%	59.8%	30.8
屋外で虫や生き物を捕まえる	**	85.9%	63.3%	22.6
虫や生き物を飼って世話をする	**	71.8%	54.6%	17.2
ものの仕組みに興味を持って分解する	**	52.9%	36.1%	16.8
不思議に思ったことを図鑑などで調べてみる	*	58.8%	44.1%	14.7
自分で工夫しておもちゃを作る	**	95.3%	82.2%	13.1
友だちと協力して何かを作る	*	89.3%	79.8%	9.5
空き箱など身近な廃材を使って工作する		90.6%	82.7%	7.9
年下の子や年上の子と一緒に遊ぶ		96.5%	91.4%	5.1

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「よくしていた」「時々していた」を合わせた%

3. 2. 4 保護者から見た子どもの姿と性格

(1) 保護者から見た現在の子どもの姿

現在の子どもの姿や行動について、保護者に尋ねた結果がTable.4である。森のようちえん群が既存園群より、「見られる」と回答した者が有意に多かった項目は、「物事を一方的に決めつけない」、「自然の中の出来事に興味がある」、「問題解決のために工夫したり友だちと協力できる」、「気になったことはとことん追究する」、「様々な情報から必要なものを選べる」、「人の話をきちんと聞ける」であった。

Table.4 保護者から見た現在の子どもの姿や行動

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
物事を一方的に決めつけない	**	84.7%	66.2%	18.5
自然の中の出来事に興味がある	**	95.3%	79.9%	15.4
問題解決のために工夫したり友だちと協力できる	**	95.3%	80.2%	15.1
気になったことはとことん追究する	**	77.9%	63.4%	14.5
様々な情報から必要なものを選べる	*	79.1%	68.5%	10.6
人の話をきちんと聞ける	*	86.0%	76.5%	9.5
自分勝手なわがままを言わない		76.7%	68.4%	8.3
友だちとケンカしても話し合いで解決できる		81.2%	73.9%	7.3
誰とでも仲良くできる		77.9%	84.9%	-7.0
年下の子を気遣うことができる		94.2%	87.3%	6.9
人のために何かしてあげるのが好きだ		86.0%	80.1%	5.9
失敗してもあきらめず挑戦する		79.1%	73.3%	5.8
嫌なことは嫌と言える		94.2%	89.3%	4.9
割り当てられた仕事はしっかりやる		90.7%	86.7%	4.0
誰にでも話しかけることができる		62.8%	65.8%	-3.0
自分から進んでなんでもやる		80.2%	78.7%	1.5
誰にでもあいさつができる		72.1%	71.1%	1.0

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「よく見られる」「時々見られる」を合わせた%

(2) 保護者から見た子どもの性格 (レジエンス尺度)

次に、保護者から見た子どもの性格について尋ねた。田中 (2011) 及び藤原・小泉 (2017) による「児童用レジリエンス尺度」から作成した17項目について尋ねた結果がTable.5である。森のようちえん群が既存園群より「あてはまる」と回答した割合が有意に多かった項目は、「何かしようと思ったとき、いろいろな方法を考える」、「自分に自信を持っている」、「何事も良い方向に考える」、「困ったことが起きても良い方向に考えられる」、「嫌なことがあった時でも、くよくよしない」、「嫌なことでも、時間がたてば自然に忘れることができる」であった。一方、既存園群のほうが森のようちえん群より「あてはまる」と回答した者が有意に多かった項目は、「学校で元気に活動することができる」であった。

(3) 就学後の子どもの様子

小学校に上がってからの子どもの様子について尋ねた結果がTable.6である。カイ2乗検定を行った結果、3項目について有意差が見られた。「登校するのをいやがる」ことが「あった」と回答した割合について、森のようちえん群 (34.5%) の方が既存園群 (18.1%) より高い傾向が見られる。一方、「授業中、先生の話が聞いていることができない」「休み時間から授業への切り替えができない」という項目について「あった」と回答した割合は、既存園群の方が有意に高かった。いわゆる「小1プロブレム」で見られる行動だが、既存園群の児童の方が教室内での問題行動がみられやすいのに対して、森のようちえん群の児童は登校自体をしぶるという形で不適応が出る傾向にあるといえる。

Table.5 子どもの性格 (レジリエンス尺度)

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
何かしようと思った時、いろいろな方法考える	**	89.4%	69.2%	20.2
自分に自信を持っている	**	85.9%	66.8%	19.1
何事も良い方向に考える	**	81.9%	63.5%	18.4
困ったことが起きても良い方向に考えられる	**	81.0%	66.5%	14.5
いやなことがあった時でも、くよくよしない	*	71.8%	57.5%	14.3
自分の間違いを認めて行動を正すことができる	*	83.3%	71.3%	12.0
困った時、友だちに助けてほしいとお願いできる		75.0%	64.4%	10.6
いやなことでも、時間がたてば自然に忘れることができる	*	93.0%	82.9%	10.1
困った時、考えるだけ考えたらもう悩まない		74.1%	65.1%	9
決めたら必ず実行する		74.4%	66.2%	8.2
苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む		40.7%	46.8%	-6.1
新しい行事や仕事にはすぐ慣れる方だ		71.4%	75.8%	-4.4
学校で元気に活動することができる	*	94.1%	98.2%	-4.1
新しい友だちや先生に積極的に話しかけられる		62.8%	66.4%	-3.6
やりはじめたことは最後までやり通す		76.7%	74.1%	2.6
つらい時は自分の気持ちを誰かに話すことができる		77.4%	79.2%	-1.8
悲しい時は自分の気持ちを誰かに伝えることができる		84.9%	83.5%	1.4

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた%

Table.6 小学校に上がってからの子どもの様子

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
登校するのをいやがる	**	34.5%	18.1%	16.4
授業中、先生の話が聞いていることができない	*	8.5%	19.4%	-10.9
授業中、友だちと話し出してしまう		22.0%	30.2%	-8.2
休み時間から授業への切り替えができない	*	2.4%	8.7%	-6.3
学校からの連絡を家庭に伝えられない		13.1%	18.5%	-5.4
忘れ物が多い		38.1%	33.6%	4.5
授業中、自分の席に座っていることができない		2.4%	6.7%	-4.3
集団で行動することができない		6.0%	7.7%	-1.7

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「よくあった」「時々あった」を合わせた%

3. 2. 5 児童が考える自分の性格や行動（自尊感情尺度）

自尊感情に関する18項目について尋ねた。この項目については、保護者には、児童本人の考えを尋ねながら一緒に回答するように指示した（Table.7）。「自分はこのままではいけないと思う」、「何かで失敗したとき、自分はダメだなと思う」、「ときどき自分はダメだなと思う」、「他の人より運動が下手だと思う」という項目において「そう思う」と答えた割合が、森のようちえん群よりも既存園群の方が有意に高いことがわかる。一方、「運動は得意な方だと思う」という項目について「そう思う」と答えた割合は、森のようちえん群のほうが有意に高い。以上から、森のようちえん群は既存園群と比べ、自尊感情が高い傾向を読みとることができる。（酒井真由子）

Table.7 児童が考える自分の性格や行動（自尊感情尺度）

		森のようちえん群 (a)	既存園群 (b)	a - b
自分はこのままではいけない	**	21.4%	37.6%	-16.2
何かで失敗したとき、自分はダメだなと思う	**	48.8%	63.7%	-14.9
ときどき自分はダメだなと思う	*	38.6%	52.9%	-14.3
運動は得意な方だと思う	*	83.3%	71.9%	11.4
他の人より運動が下手だと思う	*	21.2%	32.2%	-11
他の人より勉強ができないと思う		21.7%	30.3%	-8.6
他の人より頭がいいと思う		52.4%	45.1%	7.3
友だちが少ないと思う		14.5%	19.5%	-5.0
自分には良いところも悪いところもあると思う		86.7%	91.4%	-4.7
ほとんどの友だちに好かれていると思う		77.4%	73.1%	4.3
自分は生きていていいのだと思う		96.4%	98.6%	-2.2
きまりは守るべきだと思う	*	97.6%	99.6%	-2.0
きまりやルールは大切だと思う		96.4%	98.4%	-2.0
生まれてから今まで楽しく過ごしている		97.6%	95.9%	1.7
悪い時にはあやまるべきだと思う		97.6%	98.4%	-0.8
うそをつくことはいけないことだと思う		97.6%	98.2%	-0.6
元気であることは大切だと思う		98.8%	99.4%	-0.6
自然は大切だと思う		95.2%	95.5%	-0.3

* $p < .05$, ** $p < .01$ 数値は「とてもそう思う」「まあそう思う」を合わせた%

3. 3 因子分析及び分散分析の結果

3. 3. 1 レジリエンスについて

(1) 因子分析における項目の検討

608名（森のようちえん群83名、既存園群525名）からの回答を得て、そのうち、欠損値を含んだ608名分の回答を分析に用いた。質問紙の回答における欠損値は、森のようちえん群は全体回答数1397の内14（1.0%）、森のようちえん群は全体回答数8925の内90（1.0%）であった。また分析を行うにあたり、欠損値に関しては平均値を用いた。

各項目について項目分析を行った。「とてもあてはまる」を4、「まああてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「全くあてはまらない」を1として得点化した。17項目すべてを用いて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。その結果、因子負荷量が.35未満の項目、1項目「自分に自信を持っている」を削除し、4因子16項目が抽出された。各尺度の信頼性係数（クロンバックの α 係数）は「楽観性」.828、「挑戦性」.748、「積極的活動性」.697、「内面共有性」.790であった。回転後の結果と α 係数をTable.8に示す。

各因子名においては、レジリエンス尺度（田中，2011）を参考として作成した。第1因子は、「いやなことでも、時間が経てば自然に忘れることができる」などの6項目から成る「楽観性」とした。第2因子は、「やりはじめたことは最後までやり通す」などの4項目から成る「挑戦性」とした。第3因子は、「困ったとき、友だちに助けてほしいとお願いできる」などの4項目から成る「積極的活動性」とした。第4因子は、「悲しい時は自分の気持ちを誰かに伝えることができる」や「つらいときは自分の気持ちを誰かに話すことができる」の2項目から成る「内面共有性」とした。

Table.8 「レジリエンス」の因子分析結果（主因子法プロマックス回転後）

項目	因子負荷量				共通性
	1	2	3	4	
<第1因子：楽観性> $\alpha = .828$					
いやなことがあった時でも、くよくよしない	.852	-.045	-.091	-.059	.566
何事もよい方向に考える	.816	.004	-.026	-.011	.635
困ったことが起きてても良い方向に考えられる	.707	.026	.004	.059	.567
困ったとき、考えるだけ考えたらもう悩まない	.593	-.039	.162	-.047	.440
いやなことでも、時間がたてば自然に忘れることができる	.555	-.065	.006	.073	.319
自分の間違いを友だちから指摘されたとき、そのことを認めて行動を正しくすることができる	.386	.242	.008	-.009	.305
<第2因子：挑戦性> $\alpha = .748$					
やりはじめたことは最後までやり通す	-.017	.918	-.167	-.062	.698
決めたら必ず実行する	-.087	.742	.065	.006	.533
苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む	.051	.445	.130	.095	.361
何かしようと思ったとき、いろいろな方法を考える	.134	.372	.197	.019	.356
<第3因子：積極的活動性> $\alpha = .697$					
新しい友だちや先生に積極的に話しかけられる	-.091	-.069	.827	-.044	.523
新しい行事や仕事にはすぐ慣れる方だ	.095	-.016	.644	-.063	.443
学校で元気に活動することができている	.021	.060	.445	.014	.247
困ったとき、友だちに助けてほしいとお願いできる	.084	.053	.382	.208	.382
<第4因子：内面共有性> $\alpha = .790$					
つらい時は自分の気持ちを誰かに話すことができる	-.022	-.041	.011	.846	.684
悲しい時は自分の気持ちを誰かに伝えることができる	.011	.017	-.062	.816	.627

(2) 因子得点の比較

森のようちえん群と既存園群による就学前施設ごとの各因子得点をTable.9に示した。これらの結果を用いて、就学前施設の違によりレジリエンスに関する意識が異なるかを検討するため、レジリエンス因子(4)×就学前施設(2)の2要因分散分析を行い、森のようちえん群と既存園群それぞれの平均値とSDを算出した。

Table.9 森のようちえん群と既存園群のレジリエンスの平均値とSD

	積極的活動性	内面共有性	楽観性	挑戦性
森のようちえん群	3.17 (0.60)	3.21 (0.67)	3.03 (0.45)	2.93 (0.46)
既存園群	3.09 (0.51)	3.05 (0.62)	2.79 (0.50)	2.79 (0.53)
総和	3.10 (0.53)	3.07 (0.63)	2.82 (0.50)	2.81 (0.52)
平均値 (SD)				

その結果、森のようちえん群と既存園群の違いにおいてレジリエンスに有意な交互作用は見られなかった ($F(3, 1809) = 1.597$ n.s.)。一方、Bonferroniを用いた多重比較において就学前施設の主効果においては有意な差がみられた ($F(1, 1809) = 10.60$ $p < .01$, $\eta^2 = .02$)。既存園群より森のようちえん群の方が全体的に有意に高い得点となった ($p < .001$)。また、因子の主効果においても有意な差がみられた ($F(3, 1809) = 33.56$ $p < .01$, $\eta^2 = .05$)。「楽観性」と「挑戦性」は「積極的活動性」($p < .001$)と「内面共有性」($p < .001$)よりも得点が低かった。

3. 3. 2 自尊感情について

(1) 因子分析における項目の検討

各項目について項目分析を行った。「とてもそう思う」を4、「まあそう思う」を3、「あまり思わない」を2、「全然思わない」を1として得点化した。18項目のうち虚偽項目である「悪い時には、あやまるべきだと思う」、「きまりは守るべきだと思う」の2項目を除外し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。その結果、5因子16項目が抽出された。各尺度の信頼性係数（クロンバックの α 係数）は「社会意識」.635、「自己意識」.595、「規範意識」.516、「運動意識」.800「勉強意識」.621であった。回転後の結果と α 係数をTable.10に示す。

各因子名は、自尊感情尺度（近藤，2010）を参考として作成した。第1因子は、「ほとんどの友だちに好かれてい

ると思う」などの5項目から成る「社会意識」とした。第2因子は、「ときどき、自分はだめだと思う（逆転項目）」などの4項目から成る「自己意識」とした。第3因子は、「きまりやルールは大切だと思う」などの3項目から成る「規範意識」とした。第4因子は、「他の人より、運動がへただと思う（逆転項目）」などの2項目から成る「運動意識」とした。第5因子は、「他の人より、勉強ができないと思う（逆転項目）」などの2項目から成る「勉強意識」とした。

Table.10 「自尊感情」の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転後）

項目	因子負荷量					共通性
	1	2	3	4	5	
<第1因子：社会意識> $\alpha = .635$						
生れてから今まで楽しく過ごせている	.701	.050	.044	-.005	-.074	.792
ほとんどの友だちに好かれていると思う	.645	.077	-.184	.140	.029	.805
友だちが少ないと思う（※）	.618	.206	-.043	.183	-.158	.477
自分は生きていていいのだと思う	.599	.105	.196	-.049	.002	.468
元気であることは大切だと思う	.458	-.160	.414	-.018	-.059	.469
<第2因子：自己意識> $\alpha = .595$						
ときどき、自分はだめだと思う（※）	.091	.792	.036	-.125	.102	.488
自分はこのままではいけないと思う（※）	.092	.695	.089	-.009	.094	.519
なにかで失敗したとき、自分はだめだと思う（※）	.269	.623	-.172	-.136	.086	.605
自分には、良いところも悪いところもあると思う	.352	-.543	-.088	-.203	.335	.522
<第3因子：規範意識> $\alpha = .561$						
うそをつくことはいけないことだと思う	-.131	.116	.756	-.046	.062	.618
きまりやルールは大切だと思う	.075	-.083	.731	-.059	.009	.487
自然は大切だと思う	.045	.027	.577	.148	-.021	.521
<第4因子：運動意識> $\alpha = .800$						
運動は得意なほうだと思う	.134	-.108	-.056	.885	.012	.374
他の人より、運動がへただと思う（※）	.024	-.064	.075	.856	.141	.717
<第5因子：勉強意識> $\alpha = .621$						
他の人より、頭がいいと思う	-.074	.016	-.026	.057	.854	.656
他の人より、勉強ができないと思う（※）	-.103	.198	.084	.113	.746	.562

※は逆転項目

(2) 因子得点の比較

森のようちえん群と既存園群による就学前施設ごとの各因子得点をTable.11に示した。これらの結果を用いて、就学前施設の違いにより自尊感情に関する意識が異なるかを検討するため、自尊感情因子(4)×就学前施設(2)の2要因分散分析を行い、森のようちえん群と既存園群それぞれの平均値とSDを算出した。

Table.11 森のようちえん群と既存園群の自尊感情の平均値とSD

	社会意識	自己意識	規範意識	運動意識	勉強意識
森のようちえん群	3.51 (0.44)	2.98 (0.54)	3.69 (0.40)	3.19 (0.71)	2.83 (0.64)
既存園群	3.46 (0.42)	2.74 (0.52)	3.72 (0.36)	2.98 (0.84)	2.68 (0.71)

平均値 (SD)

その結果、森のようちえん群と既存園群の違いにおいて有意な交互作用が見られた ($F(4,2288) = 3.34, p < .01, \eta^2 = .01$)。Bonferroniを用いた多重比較では、森のようちえん群の方が既存園群よりも「自己意識」($p < .001$)と「運動意識」($p < .01$)が有意に高い得点であった (Figure.1)。(大道香織)

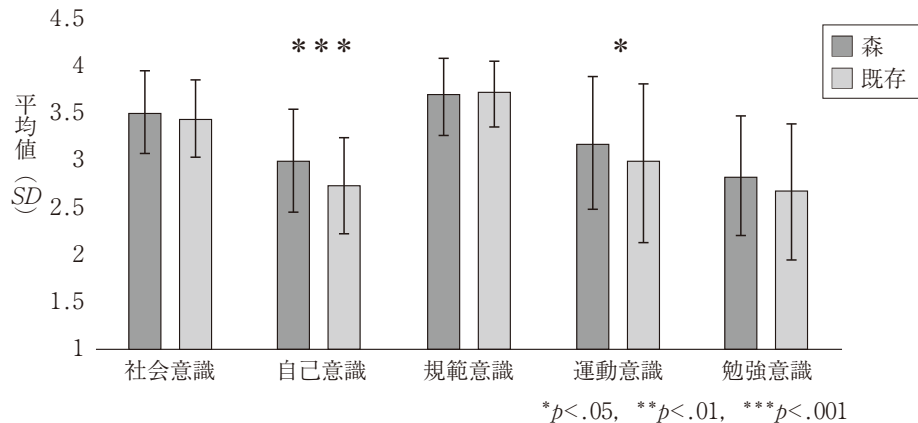


Figure.1 森のようちえん群と既存園群の自尊感情の比較

4 考察

4.1 「森のようちえん」卒園児のレジリエンスと自尊感情について

レジリエンス尺度に関する項目の回答のクロス集計では、7項目について森のようちえん群の方が「あてはまる」との回答が有意に高い傾向がみられた。また、レジリエンス尺度の因子分析及び分散分析を実施した結果、森のようちえん群と既存園群の違いにおいてレジリエンスに有意な交互作用は見られなかったが、就学前施設の主効果においては有意な差がみられ、既存園群より森のようちえん群の方が全体的に有意に高い得点となった。ここから、どの因子の得点が具体的に高いとまではいえないが、苦境にあっても状況を肯定的に捉え、問題を解決していこうとする態度や行動について、「森のようちえん」の卒園児の方が全体的に多く見られる傾向にあるといえることがわかった。

自尊感情尺度の因子分析及び分散分析の結果では、森のようちえん群と既存園群の違いにおいて、有意な交互作用が見られ、森のようちえん群の方が「自己意識」と「運動意識」において有意に高かった。すなわち、「森のようちえん」の卒園児は、既存園の卒園児に比べて自分をダメだと思ふことが少なく、自分をポジティブに捉える基本的自尊感情が高いことや、運動面について他人より優れているという社会的自尊感情が高いことが明らかになった。

国立青少年教育振興機構は、子どもの頃の自然体験が豊富な青少年ほど自己肯定感が高い傾向にあること（国立青少年教育振興機構 2019）や、「体力に自信がある」と考える割合が高くなること（国立青少年教育振興機構 2014）、さらに子どもの頃に外遊びに熱中した青少年は「へこたれない力」が高くなること（国立青少年教育振興機構 2018）などを明らかにしている。本調査の結果は、こうした先行研究の結果にも合致するものであり、自然の中での体験活動を重視する「森のようちえん」の教育が、卒園児のレジリエンスや自尊感情に、一定の影響を与えている可能性はあると考えられる。

また本調査では、就学前施設において試行錯誤したり協働したりする経験について、森のようちえん群の子どもの方が幼児期によく行っていたことが明らかになった。「森のようちえん」においては、屋外での自然体験活動にかぎらず、子どもの興味関心に基づき主体的に作ったり調べたりする経験が豊富に用意されていることが示されたといえる。この環境が、あきらめず粘り強くものごとに取り組むレジリエンスの育成に影響を与える可能性はあるだろう。

ただし、卒園児のレジリエンスや自尊感情には、「森のようちえん」における教育内容だけでなく、他にもさまざまな要素が影響を与えていることにも注意が必要である。たとえば、本調査では、森のようちえん群の家庭の方が、図鑑や外国の書物、クラシック音楽のCDなどの物品を所有する割合が高いことが明らかになった。こうした文化的所有材は家庭の文化資本の高さを反映している。家庭の文化資本が子どもの学力に影響を与えることは、荻谷（2001）などによりすでに明らかにされているが、家庭環境は狭義の学力だけでなく、社会情動的スキルにも影響を与える可能性がある。山本（2013）は、大学生を対象とした調査において、「自然体験を豊富に経験」した学生の74%が、幼少期に子どもを美術館や観察会に連れて行くような教育的配慮をする家庭で育っていることを明らかにしており、勝山・山本（2013）も保護者の経済力や文化資本が幼少期の自然体験活動にも影響を与えていることを指摘している。「森のようちえん」を選ぶ家庭の経済力や、所有する文化資本が、既存園に子どもを通わせる家庭よりも高いとすれば、こうした家庭環境の違いが、子どもの社会情動的スキルに大きな影響を与えるであろうことは想像に難くない。

また、「森のようちえん」の保護者が就学前施設に期待することについては、全般的に既存園群よりも期待度が低

い中で、直接体験や遊びを通して学びの意欲を高めるといった社会情動的スキルに関わる項目への期待が上位を占めていた。こうした保護者の就学前施設教育に対する意識は、家庭教育にも反映されている可能性がある。今後、「森のようちえん」の卒園児の家庭の文化的・教育的環境の違いも視野に入れ、さらなる分析を行う必要がある。(山口美和)

4. 2 本研究の限界及び残された課題

本調査は、回答者が保護者であるため、児童の性格や行動については保護者の主観を通じた評価であるという限界がある。また、既存園群のサンプル数に比べ森のようちえん群のサンプル数が少なくなってしまうため、比較の妥当性に課題が残った。自尊感情における因子分析において α 係数が低いことについても、今後の検討課題である。調査では、森のようちえん群は既存園群に比べ「登校するのをいやがる」割合が多い傾向が見られたが、学校への適応については、紙幅の関係で本稿では十分な考察ができなかった。これについても、今後の課題としたい。(山口美和)

注

1) 森のようちえん全国ネットワーク連盟による定義 <http://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien> (2020年8月31日最終アクセス)

引用・参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『速報版 幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査 報告書』
 ----- (2019) 「幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査」
 藤原佑一・小泉令三 (2017) 「小学校5年生の社会的能力とレジリエンスの関係—小学生版「社会性と情動」尺度と児童用レジリエンス尺度の関係—」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』第7号
 古内さや子・長田洋和 (2015) 「就学前児のレジリエンスが問題行動に及ぼす影響」『専修人間科学論集』第5巻第1号
 Gillis, H. L. and E. Speelman (2008), "Are challenge (ropes) courses an effective tool? A meta-analysis", *Journal of Experiential Education*, Vol. 31/2, pp. 111-135.
 原郁水・古田真司 (2012) 「小学生のレジリエンスと対人ストレスコーピングおよびセルフエスティームの関連」『東海学校保健研究』第36巻第1号
 Heckman, James. J. (2013) *Giving Kids a Fair Chance*, The MIT Press, Boston (=古草秀子訳 (2015) 『幼児教育の経済学』東洋経済新報社)
 Ikesako Hiroko & Miyamoto Koji (2015), *Fostering Social and Emotional Skills Through Families, Schools and Communities: Summary of international evidence and implication for Japan's educational practices and research*, OECD Education Working Papers No.121 (=ベネッセ教育総合研究所訳 (2015) 「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成—国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆」)
 荻谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機』有信堂
 片岡麻里・久芳美恵子ほか (2011) 「ガールスカウト経験が中・高生の自己肯定感に与える影響」日本教育心理学会発表論文集53(0)
 勝山吉章・山本俊光 (2013) 「家庭の経済資本・文化資本に相関する子どもの自然体験」『福岡大学研究部論集B 社会科学編』第6号
 国立青少年教育振興機構 (2014) 『青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成24年度調査) 報告書』
 ----- (2018) 『子どもの頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究』
 ----- (2019) 『青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成28年度調査) 報告書』
 近藤卓 (2010) 『自尊感情と共有体験の心理学』金子書房
 長尾史英・芝崎美和ほか (2008) 「幼児用レジリエンス尺度の作成」『幼年教育研究年報』第30巻
 OECD (2015) *Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotion Skills*. (=無藤隆・秋田喜代美監訳, 荒牧美佐子, 都村聞人ほか訳 (2018) 『社会情動的スキル—学びに向かう力』明石書店)
 小塩真司・中谷素之ほか (2002) 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性」『カウンセリング研究』第35巻
 高辻千恵 (2002) 「幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討—」『教育心理学研究』第50巻
 田中文夫 (2011) 「小学生のレジリエンスに関する研究—尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」弘前大学修士論文
 山本俊光 (2013) 「高校生の幼少期の自然体験と現在の社会性」『福岡大学研究部論集B 社会科学編』第6号
 *本研究は、トヨタ財団2018年度社会コミュニケーションプログラム助成D18-SC-0002 (代表者: 西村早栄子) による研究成果の一部である。

The Influence of Early Childhood Experiences on the Development of Resilience and Self-esteem

Miwa YAMAGUCHI* · Mayuko SAKAI** · Hiroe KIDO*** · Kaori OMICHI****

ABSTRACT

This study sought to investigate how early childhood education shapes children's resilience and self-esteem. A questionnaire survey was administered among parents of second-grade graduates of forest kindergarten (group F) and of general preschools attending public elementary schools in three midsize cities (group G). For group F, 85 of 146 participants sent back responses (response rate: 58.2%) while for group G, 525 of 1,382 participants answered the survey (response rate: 38.0%). Parents were asked to respond about their children's appearance. According to the cross-analysis, children in group F had a significantly higher percentage of "agree" responses to eight resilience-related items than those in group G. For self-esteem, answers to the three self-denial items were significantly lower in group F than in group G. The resilience and self-esteem items underwent factor analysis; an analysis of variance with type of preschool was then performed, and each factor was extracted. For resilience, no significant interaction was observed between the two groups, but for self-esteem, a significant interaction was found, with significantly higher values for self-consciousness and motor perception.

Keyword

social emotional competencies, forest kindergarten, graduate, resilience, self-esteem

* School Education ** Ueda Women's Junior College *** Gifu Shotoku Gakuen Junior College
**** Graduate School of Hiroshima University